

AAスクールの建築教育の実際

田澤年美 (共同研究者)

原 坦 (共同研究者)

平山 達 (共同研究者)

草深幸司 (共同研究者)

山下 泉 (共同研究者)

田淵 諭 (共同研究者)

連 健夫 (本稿執筆者)

Architectural Education and Experimental Study at the Architectural Association School of Architecture

Takeo Muraji et al.

This is a report of the architectural education and the experimental study at the Architectural Association School of Architecture in London which is unique and distinctive compared with other school. The course in under graduate basically takes 5 years to obtain AA diploma. There are 4 units for 1st year, 9 units for 2nd~3rd year, 11 units for 4~5th year. Each unit has 3~4 tutors and 10~15 students. The program of each unit is entirely different. In the beginning, students chose a unit that they wish to study regarding the program and the tutors chose suitable students for the unit in the interview.

The education at the AA is notably significant because architectural schools are now required the identity and flexibility according to various students' requirements. The aspects of the education at the AA regarding students' creativity might be useful to find out appropriate education in the future.



① ベッドフォードスクエアに面するAAスクールの校舎

まえがき

本稿は平成4~5年度に本学共同研究「芸術系大学における建築教育の状況と将来の展望に関する情報の調査研究」を表記のメンバーで行ったその第一報として報ずるものである。それは、研究として行う過程の中で、出来るだけ生の実状をまず知りたいたし、幸い本学出身の連健夫君がイギリスのAAスクール(世界的によく知られている建築教育機関)の大学院に在籍していた。またその後同大学の教員となっている(日本の大学とはやや趣が違おうのだが本人はAAスクール助手と云って日本の建築専門雑誌に記事が掲載されている)。

意向を伝えると快諾が得られ、AAスクールの学部の学習と学生の生活体験について、そのシステムとそこにいる学生の悩み、喜び、そして生長していく過程を当の本人自身がどれだけ自分のものにしていくかの状況がよくわかる報告が得られた。

従って、まず全文を紹介することが最良と考え、字句や文のつながりは連君の文を尊重して、主査田澤年美教授が監修し、幹事原坦が本人の了解を得て「私」を「筆者」とするなど若干の修正を行った上で、今回掲載させて戴いた。

又、AAスクール大学院の状況、および分析的研究としての我国の実状との比較検討、更にAAスクールだけでなく世界の建築教育の状況をあわせた比較と分析研究は、現在進行しているところでもあり、機会を改めて報告を行いたいと考えている。(原坦記)

はじめに

AAスクール(Architectural Association School of Architecture)は、1847年に創設されたアングロサクソン系では最古の、そしてイギリスにおいて最大規模の独立した建築学校である(写真①)。創設当時からのユニークな建築教育は現在も行われており、世界中から建築家をめざした学生達が集まって来るインターナショナルな学校である。筆者は1991年9月にAAスクールに入り、現在同大学院のAA Graduate Honours Diploma

コースに所属している。このレポートは入学1年目に体験した学部でのプログラムを中心に報告し、AAスクールの建築教育の実際とそのコンセプトを考察するものである。

1. AAスクールの概要

a. 組織

AAスクールの母体であるArchitectural Associationは、現在世界約80ヶ国に約2000人の会員を持っており、建築の教育及び文化活動を行っている。ここでは著名な建築家や芸術家の講演会、展示会、そして年2回発行されるAAファイル等の出版活動を行っている。それをまとめる上部組織として評議会があり、そのメンバーにはマイケル＝ホブキンス、リチャード＝ロジャーズやリチャード＝グリムショウ等の有名建築家が名を連ねている。その教育部門であるAAスクールの学長は全会員の投票によって選出され、評議会との契約で就任する。評議会は基本的に学校の運営には口を出さないのが決まりで、学長の考え方が学校の運営に十分反映される組織となっている。学長は各ユニット(研究室)のチューター(教員)を選出する全権限を持っており、チューターは学長との個人契約で雇われる。従ってどんなユニットが用意されるかは、すべて学長の考え次第である。

AAスクールは、基本的に学部5年制の建築専門の高等教育機関と考えてよい(表①)。それに基礎的な表現力を学ぶための1年間のファンデーションコース、そして専門的に研究や設計を行うコースとして大学院がある。大学院には現在、「歴史と理論」「環境とエネルギー」「都市と住宅」「デザイン」の4研究室

表① 学校構成とRIBA試験との関係

コース名	年度	ユニット(名・数・内容)	
ポストグラデュエイト (Post Graduate)	大学院	歴史と理論	最低1年間のGraduate Diploma
		環境とエネルギー	最低2年間のGraduate Honours Diploma
		都市と住宅	2年9ヶ月～5年のPh.D.
		デザイン	1年6ヶ月のGraduate Diploma in Design
→ 1年間の建築実務経験の後RIBA PART 3の審査			
ディプロマスクール (Diploma)	5年 4年	11	→ 5年終了時にDiplomaの審査、RIBA PART 2の審査
→ 1年間の建築実務経験			
インターミディエート (Intermediate)	3年 2年	9	→ 3年終了時にRIBA PART 1の審査
ファーストイヤー (First Year)	1年	4	
ファンデーション (Foundation)	基礎科	1	建築の勉強をしたことがない人のための1年間コース

*卒業を前提とする上図の5段階以外に、他大学から経験を積むためにやってくる人達のための1年間のエクステンション・スタディー・コースがある。

がある。これ以外に、ある程度の建築経験を持つ編入生、交換留学生の為の1年間のエクステンションスタディーのコースが用意されている。学部5年制の内訳はファーストイヤー、インターミディエート(2, 3年生)、ディプロマスクール(4, 5年生)である。全学生数は約440名(学部300名、大学院70名、週末コース70名)で、教員はそれに対し常勤で約80名を有する。これに学外から多くの招待講師を加え、密度の濃い建築教育が行われている。

現在の英国の一般の建築家資格制度は、RIBA(王立英国建築家協会)によって認定され、3段階の審査規準が設けられている。RIBA PART 1は、3年間の建築教育(Degree Course: 日本の大学の学部に対応する)の後に行われる建築の基礎的な知識とデザインの審査、RIBA PART 2は1年間の建築実務教育プラス2年間の建築教育(Diploma Course)の後に行われる、主にデザイン能力と技術に関する審査がある。これらの審査は、RIBAの認定した審査官が年度末に学校外部から招待され、教官が各学生のポートフォリオ(作品集)をプレゼンテーションして審査が行われる。従って、教官は各学生のポートフォリオを十分に理解しておく必要がある。RIBAの最後の審査はPART 3と呼ばれる。PART 1, 2習得の上、1年間の建築実務経験の後に受ける資格試験であり、実務能力、法規等に関する筆記試験および口頭審査である。これが審査の基本であるが、5年の建築教育を1度に済ませ同時にRIBA PART 1, 2を取得した後、2年の実務経験をを経てPART 3の審査を受けることもできる。AAスクールは1920年以来RIBA公認の建築学校として認められていると同時に、英国唯一のインデペンデントスクールとして独自の教育システムを守り続けてきた。AAの卒業資格AA Diplomaは、RIBAのPART 1, 2とは独立したものである。一般の大学に比べて卒業できる比率はきわめて低く毎年20%程度の厳しいものとなっている。これは大学院においても同様の比率で、同学年25人中、年内にAA Graduate Diplomaの審査にパスした者は、筆者を含め5人であった。



②ユニットに入るためのインタビュー(中央はラウール＝ブンショーンテン氏)

b. ユニット制度

AAの教育システムの特徴として、まず第1にあげられるのはユニット制度である。ユニットとは10～15人の学生に対し2, 3人のチューターからなる小さな学校のようなものである。1年間を通してのプログラムは各ユニットに全面的にまかされているため、プログラムの内容は様々である。これがこの学校の多様性とダイナミックな校風を支える1つの理由となっている。しかしながら学生によってはプログラムの内容が本人に合わず消化不良をおこす学生が毎年何人かいる。そういった学生は、途中で他のユニットに移るか、学校をやめることになる。

各ユニットで運営される1年間のプログラムの内容は年度始め(イントロダクションウィーク)に全学生に対して説明される。学生はそこから気に入ったユニットを選び、希望するユニットの面接を受け(写真②)、承諾されればそのユニットの学生となる。学生によってはどこのユニットでも受け入れてもらえず、事務局の仲介によって押し込んでもらうケースも少なくない。従って各学生は、面接に持参するポートフォリオをできるだけ良いものにしておくよう全力を注ぐことになる。また一方、人気のあるユニットと、そうでないユニットが当然生じてくる。学生の指名がまったく無いユニットは自然消滅となるため、ユニットの方でもできるだけ魅力的なプログラムを作るよう努力し、また良い学生を集めようとする。この両者の関係がAAスクール全体のレベルを維持し、また独自性、創造性を支えている大きな理由となっている。

現在ファーストイヤーには4つ、インターミディエートには9つ、ディプロマスクールには11のユニットがある。これらのユニットは、その運営状況、評判や進級、卒業状況、RIBAの合格状況等から学長の判断により毎年3分の1程度が入れ替えられている。従って各チューターはユニットの存続がかかっているため、必然的にその内容を充実するべく力を注ぐことになる。デザイン教育におけるユニット制度の独自性、創造性を高める効果が徐々に認められ、ロンドン大学バートレット校や東ロンドン大学、北ロンドン大学等、他の大学でも最近取り入れられている。

c. 入学試験

入学は、基本的には書類審査と面接試験によって決定されるが、面接試験の意味合いは大変大きい。面接試験において、以前の学校の成績が良くともAAの校風とは合わないと判断された学生は容赦なく落とされる。またそうでなくとも持参したポートフォリオのレベルが低い場合、希望の学年には入れず下の学年を勧められる。一旦、決定された学年は、通常変更されることはなく、また入学後学年を飛び越えて進学することはほとんどないため、受験者、審査官共その決定には力が入る。面接はチューター1人と現役の学生1人、そして事務局の1人が審査官

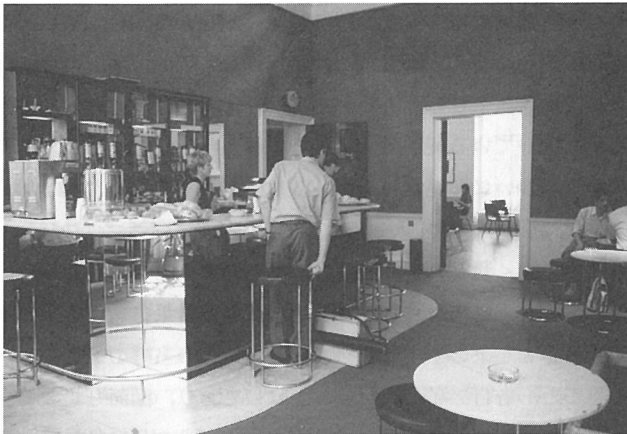
となり、受験者は1人ずつ持参のポートフォリオを説明し、審査官の質問に答える形で行われる。筆者も以前、学生の審査官として面接試験をしたことがあるが、4人の受験者の内、1人は現在通っている英国の大学からの編入希望者で、そこでの成績が大変良いにもかかわらず、審査官チューターの意見は「AAの校風に合っていない、入ったとしてもお互いに不幸なだけだ」と言って、強く現在の学校を続ける事を勧め入学希望をしりぞけた。他の3人は海外からの受験者で、面接結果は希望学年の1年下及び2年下の学年で合格となった。この当時の筆者の目から見ると、各自アイデアがしっかりしており、図面も比較的良く書けているのであるが、審査官チューターの目は異なり、探求が浅い、独自性に欠ける、プロセスが一般的過ぎるといったネガティブな評価であった。

AAスクールの建築教育の特徴として、設計の結果よりもそのプロセスを重要視し、課題にどのようにアプローチしたか、どのように探求したかが審査の主な判断規準となる。一般にAAスクールの学生のポートフォリオは、そのプロセスを中心にまとめたものであり、100枚近くの図面やモデルで構成される。これに対し一般に他大学からの学生の作品は設計の結果のみを図面化したものが多く、その枚数も少ない。従って、どうしてもプロセスに関して説明不足になるため、面接では主にその点が追及されるようである。どのような学生がAAスクールの校風に合っているかという点について良く言われるのは、早いプログラムの流れについて行くことができ、厳しい批評に耐え理解し、何にでも前向きに取り組むことができるタフ学生であるということである。

一般に日本の学生は、与えられた課題に対しあらかじめその方法が与えられている場合は巧みに取り組むが、自分で興味を発見し、それを独自の方法でどんどんと発展させて行くということについては、苦手なように見受けられる。日本でしっかりと建築の知識を身に付け設計の訓練を受けている学生か、または、英語がかなり良くできチューターのアドバイスが十分理解できる学生が比較的伸びているようであり、どちらの能力も弱い学生は、何も得ることができず途中でリタイアすることになる。日本の学校でうまくいかず、それならAAスクールでやろうといった安易な考えで入ってくる学生にこのタイプが多様なに思う。

d. 施設、設備

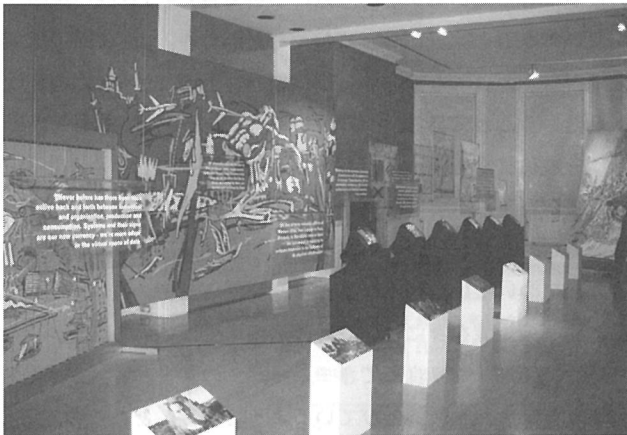
AAスクールは製図板の無い学校としても知られている。通常の建築学校と言えは製図台のあるスタジオをイメージするが、この学校には、そのような教室が無い。学生は家で図面やモデルを制作し、学校では主にチューターとのチュートリアル(教官と1対1でプロジェクトについて話し合う)を行いながら各自のプロジェクトを進めていく。従って製図教室は特に必要がな



③学校の中心にあるバー。多くの学生・教師が談笑している



④図書館。机を動かせばパーティー会場にもなる



⑤展示室。ナイジェル・コースの展示が行われている



⑥講義室。多くの建築家がここで講演を行った

く、その代わりにチュートリアルのための各ユニットの部屋が用意されている。ユニット全員のミーティングやジュリー（設計の講評会）については多目的教室で行われる。多目的教室では一般教養の授業も行われる。この学校の建築教育は、ユニットにおける設計を中心として行われるが、併せて建築の一般教養（General Study）として、歴史、構造や設備等の科目を選択必修する。また、写真やエッチング、コンピューター等、表現方法としての技術を学ぶ（Communication Study）選択必修科目がある。これらの授業を行う部屋として、一般教室、講義室、写真室、コンピューター室等が用意されている。

この学校の施設として特筆されるのは、学校の中心にバー（写真③）があることである。ここでは、学生、チューター、メンバーの建築家が昼間からビールやワインを飲みながら談笑している。元々建築家達のサロンから発生した学校だけに当然と言えば当然である。少しの勇気さえあれば、著名な建築家や評論家との建築談義を楽しむことができる。バーの横には図書室がある（写真④）。ユニットごとに区切られた書庫もあり、プログラムに関係する本がまとめられている。ここは、必要に応じ机を動かしてパーティー会場等にも使われる。入口を入ったすぐ横手には展示室（写真⑤）がある。AAスクールは出版活動と同様、展示会活動にも力を入れており、1年を通じて、世界中から様々な建築家、芸術家が出てきて展示会を行っている。展示室の反対側には講義室（写真⑥）がある。ここでは先程述べた一般教養の講義の他、著名な建築家や評論家達の講演が行われる。夕方から行われる講演はイブニングレクチャーと呼ばれ、仕事帰りの会員の姿も多く見かける。人気の講演では満員で入り切れない時もあるが、別室に置かれたTVモニターで聴講することができる。実験やモデルの制作が重要視される指導においてワークショップ（写真⑦）は欠くことのできない施設である。ここでは木工、金工の充実した設備が用意されており、常に2人の教官が学生の指導、相談にあたっている。材料は各自で購入するのが原則であるが、おもしろいことに学生のワークの内容が良い場合は、教官の裁量で材料を支給してくれる。

2. 建築教育の実際

ここでは、筆者がAAスクールに入って1年目にエクステンションスタディーの学生としてインターミディエート、ユニット2で体験したプログラムを自分のプロジェクトの進展具合と共に説明し、それを考察する。ユニットのメインテーマはSurveillance（監視）である。学校概要には、各ユニットの1年間のプログラムの説明書が載せられる。ここには、大きく1）オブジェ、2）部屋、3）道・地区、4）都市というプログラムの流れとその内容が説明されていた。

a. 課題

ユニットにおける最初のミーティングはイントロダクションウィークの次の日の夕方、AAスクールの近くのカフェバーで行われた。各学生の自己紹介の後、これといったプログラムの説明もなく、ただ交流を深めるといった感じの簡単なものであった。学生の人数は15人にチューターは4人である。ミーティングの後、1人ずつに封筒が配られた。その封筒には、このように書いてあった。

「あなたは今までに、あなたが調査またはデザインした空間が、そこでの活動に影響を受けるといったことがありますか。もし思ったことがないなら、明日リバプールストリート駅に朝8時半に行きなさい。もし思ったことがあるなら、この封筒を家に帰った後、開けなさい」

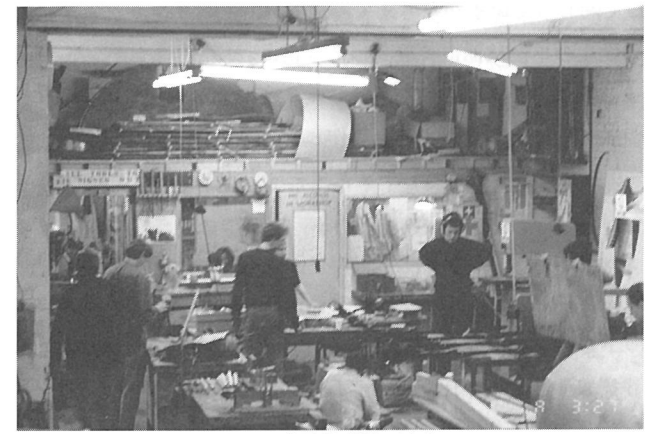
筆者は、活動と空間との間には強い関係があると考えたので、封筒を開けることにした。その中には、課題の内容と1ヶ月のスケジュールが書かれていた。

課題<監視>

- ①リバプールストリート駅に朝8時に行きなさい、そして少し変わった人を見つけ、その後を尾行しなさい。その人の動作、行動、その他その人が出くわすことすべてを、道路や信号等、都市との関係を考えながら、克明に記録しなさい。その方法として記述、写真撮影、ビデオ、テープレコーダー等を用いなさい。少なくとも4時間続け色々な人を調査しなさい。
 - ②これら採集した記録を元に、仮説的なシナリオを作りなさい。この中であなたのプロジェクトのテーマを見出しなさい。カラージュはあなたの想像をかきたてるのに良い方法です。
 - ③都市の部分とその活動の関係について表現したカタログを制作しなさい。その中から都市のシステムを発見しなさい。
 - ④チュートリアルは10月8日、10日、12日（セクレタリーを通じて予約しなさい）。
 - ⑤ジュリー：10月14日
- とあった。何と不可解な内容なのだろう、明日さっそく最初のチュートリアルがあり、1週間後にジュリー（講評会）があるとは、なんと忙しいスケジュールだろう、と感じたが悩んでいる暇はない、翌朝さっそく駅に行くことにした。

b. 調査とチュートリアル

朝8時のリバプールストリート駅は、ラッシュの時間の始まりで、バンク（銀行、事務所街）に通勤する多くの通勤客でごったがえしていた。筆者は、課題の指示通り4時間の間、通勤者、学生、浮浪者、主婦等合計8人を尾行した。記録をしながら写真を撮り、同時にビデオカメラで撮影した。何人かは尾行している筆者に気づき、途中で尾行中止となったが、他の尾行は概ねうまく記録できたので、さっそく写真をプリントして午後にチュートリアルを受けた。



⑦ワークショップ。金工や木工の工作器械が備えてある



⑧筆者が追跡したのはファッション学校の学生であった

チュートリアルは、3人のチューターが、学生1人ずつに調査内容を聞きアドバイスを与える形で行われた。ユニットの部屋は狭いが、6人程度は座れるので次の学生も一緒に前の学生の話聞くことができる。ある学生は浮浪者を4時間尾行していた。チューターのアドバイスは、「浮浪者がゴミ箱をあさる事に着目し、どんなゴミが捨てられているか、どのような物を浮浪者は好むのかを調べてみたらどうか」であった。またある学生はオフィスレディーを尾行し、途中、化粧品店で香水を買った状況を詳細に報告していた。彼のプロジェクトはその後ずっと「香り」というものを探求することとなった。私は2人の尾行事例をビデオと写真を用いて説明した。1人は若い男性で駅を出た後、郵便局に寄り、バスを乗るところまで尾行した。もう1人は若い女性でバンク方向とは逆方向に15分程歩いた後、ファッションスクールに入った（写真⑧）。チューターは、「もう1度駅に行き尾行した同じコースを広告、外灯やベンチ等、都市の部分（構造物）に着目しながら歩き、どのようなものが環境と

して関わっているかを考えてみなさい。ファッションスクールの学生の事例は面白く展開しそうだよ」とアドバイスした。翌日また駅に行き調査をした。その後2度のチュートリアルを受け、ジュリーに出す図面4枚を制作した。

c. ピンナップジュリー

ジュリー(作品講評会)には、ユニットのチューターのための参加による簡単なピンナップジュリーと呼ばれるものと、他のユニットからチューターを招待して行われるもの、更には学外から建築家や評論家を呼んで行うもの等、様々なレベルがある。頻度は各ユニットで異なるが、概ねピンナップジュリーは1学期に4回程度、外部から招待チューターを呼んでのジュリーは2回程度行われている。つまり2週間に1度程度ジュリーがあるわけで、学生にはかなり頻繁に作品を制作する事が要求される。この作品とは設計の最終結果ではなく、どのように作品に取り組んでいるかという途中経過の報告である。よって、その時々学生の考え方がジュリーをきっかけに途中経過として作品に表現されることになり、後になっても学生のその時々着目点と進捗具合をポートフォリオを見る事により理解することができる。

最初のピンナップジュリーには、筆者は都市の部分と尾行した人の行動を表現した図と都市の部分进行分类した表そしてカラージュ(写真⑨⑩)を出した。カラージュには尾行した2人を使い恋愛物語を仮想し表現した。このアイデアは、人を含め都市を仮想の世界で一旦分解した後に再構築するというものであった。仮想の世界と現実の世界の説明について、チューターから「その考え方を表現するモデルを造りなさい」とのアドバイスを受けた。後にそのモデルを制作した(写真⑪)。次のステップで、筆者はファッションスクールの中での尾行調査も行い、駅

から建物の中も含めた全体について考察してみた(写真⑫⑬)。筆者の興味は、尾行した学生と尾行している筆者自身、そして、学生が見ている信号との三者の関係、そして、学生がデザインしている洋服と我々が今着ている服についての関係であった。

ジュリーでは、十分な進展が見られない学生やチュートリアルを受けず見当違いの事をやっている学生に対しては、調査のやり直しを求め、ユニットの考え方をしっかりと説明し、学生の課題に取り組む態度を改善するよう指導していた。

d. プロジェクトの進展

ユニットのプログラムは1年間の概ねの方針は決められているが、どのような形で進んでいくかの詳しいことは学生に知らせていない。チューター自身がはっきりそれを設定していないユニットもある。これは、学生プロジェクトの進み具合を睨みながらユニットのプログラムを調整できるようにしているからである。学生に与えられる課題自体、住宅や美術館を設計しなさいというような最終的ゴールが設定されているわけではない。学生自身が興味を持つことから始まり、その中で個性と独自性が十分に活かされ、それが開拓される様、プログラムはきわめて柔軟になっている。学生自身に問題意識を持たせ考えさせるために、チューターのアドバイスは、時には一見学生を悩ませる事であったり、プロジェクトに直接関係のない体験を要求するものであったりする。他の学校における、課題の結果があらかじめ設定され、解決方法が与えられ、学生がいかに条件を解決し満足のゆく設計をするかを問う設計課題とは大きく異なっている。

1学期の中頃には、次の指示書が与えられた。

〈監視〉

A. できごととスクリーンプレイ。

- B. できごとのモデルを造りなさい。そこに、あなたの発見した観点、興味を表現しなさい。
- C. 個人的なコミュニケーション空間を考えなさい。
- D. インスタレーションをしなさい。
- E. テーマを表現したスーツケースを造りなさい。

かなり抽象的で、どのように進めていってよいか、これだけではわからない。さっそく、チュートリアルを受けた。チューターの説明では、「そんなにこの指示書を気にする必要はない。今の方向で進めていけば良い、ただ進めていく中でモデルをできるだけ多く造ることを心掛けなさい」であった。各ユニット、時期によって指示書のスタイルはずいぶん異なる。かなり詳しくいつどのようにするのか、何を考えれば良いか、何を作ればよいかを指示したものがあるかと思えば、参照資料のリストのみをあげたもの、抽象的な内容で学生の判断を期待するもの等、各ユニットのプログラム同様、様々である。

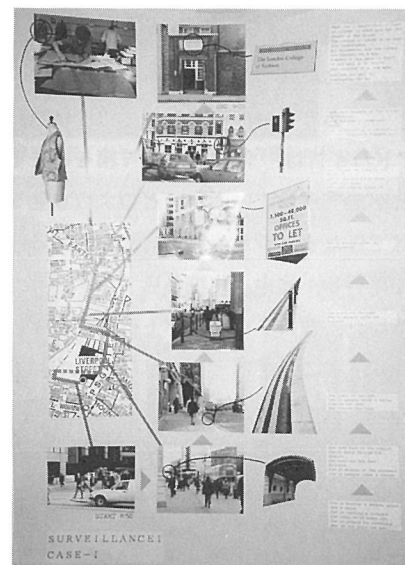
筆者が目にしたのは服飾デザインに使用するダミーモデルである(写真⑭)。その理由は、筆者のターゲットは追跡した服飾デザイン学校的女子学生であり、その女子学生のターゲットはダミーモデルであり、これを探求することは重要と考えたからである。そして、着目している事柄、すなわち「ボディーの内側のスペース」「立体を制作するパターン紙」「服飾デザインのプロセス」を表現した立体のカラージュを作った。これに対するチューターのアドバイスは「着目点は面白いが、これはあくまで縮小モデルである。1対1のスケールで捉えなさい。そうすれば、よりしっかりした探求ができる」であった。AAスクールでは、一般に1対1のスケールを大変大事にするように思う。これは縮小されたものは原寸とは異なり、原寸で物を考えることによって、より説得力のある発見と発展があるからであろう。

次に制作したのが原寸のダミーモデルの断面と筆者のター

ゲットである女子学生の体の断面を重ね合わせたモデルであった。女子学生の体はダミーモデルよりもやや小さく、その間にすき間が生じている。ここで考えたことは、人間の体は唯一のものであり、その内側はパーソナル空間と考えることができる。それに対し、ダミーモデルはあるサイズの平均値で造られたデザインの為のモデルであり、その内側はパブリックスペースと考えることができる。従って、その間のスペースは、パブリックスペースからプライベートスペースを引算したスペースと考えることができるであった。このアイデアに対して、チューターの反応が大変良かったので、この時点から、〈間のスペース〉を探求することになった。

次に渡された指示書には、学期末までの1ヶ月半のスケジュールが書かれていた。ワークショップ(工作室)利用の説明会、チュートリアルの日付、論文のセミナー、ピンナップジュリー及び学期末ジュリーの日付等である。AAスクールの必修科目として、前述した以外に、デザインプロジェクトをサポートする形で、論文とテクニカルスタディー(構造、設備、材料)の提出があり、これは、ユニットのプログラムの中で、指導を受けることになる。ワークショップはこのテクニカルスタディーの勉強に役立てる意味で設けられている。論文のセミナーで興味深いのは、その文の内容のみならず、字体や字の並べ方等にも着目している点であった。チューターが教材として紹介した論文では、強調したい文字が通常の2倍の大きさで書かれており、またある段落の文配置が、3角形になっていた。

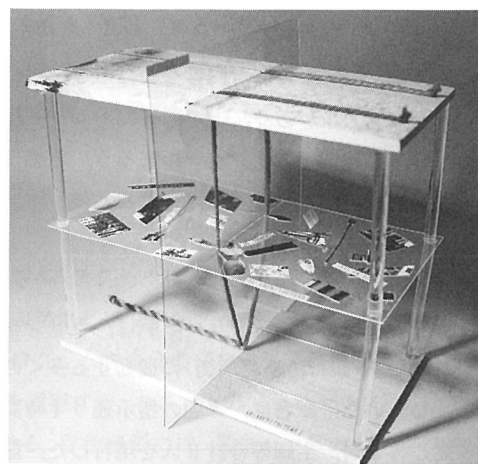
「ダミーモデルを買いなさい」、チュートリアルで、ややプロジェクトに進展が見られない時に言われた。「実際のモデルを使ってワークをしてみなさい、そうすればまた新たな発見があり、発想もでてくる」という主旨である。さて、購入するといっても、そのようなものがどこにあるのか。まず服飾デザイン学



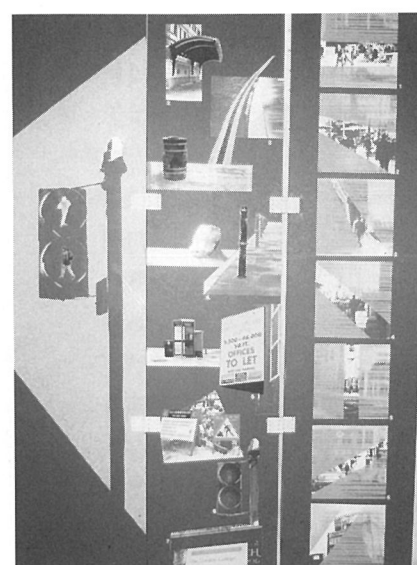
⑨ 追跡対象者の歩いた道のりと都市のフラグメント



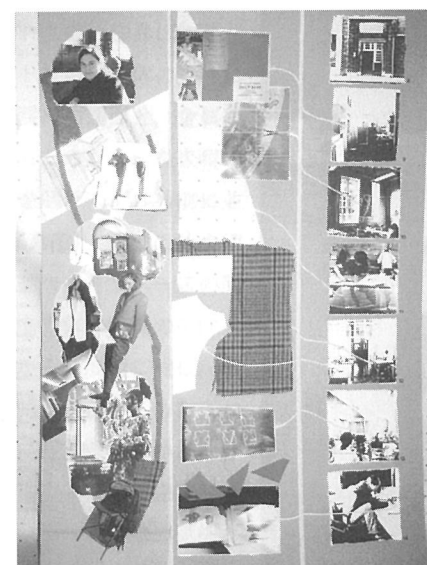
⑩ 2人の追跡対象者を使って仮説の物語を表現したカラージュ



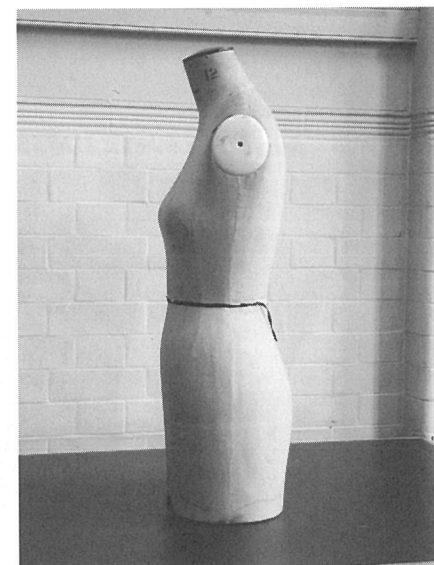
⑪ 筆者の考えを表現したコンセプチュアルモデル



⑫ 駅からファッション学校までの追跡対象者と都市との関係

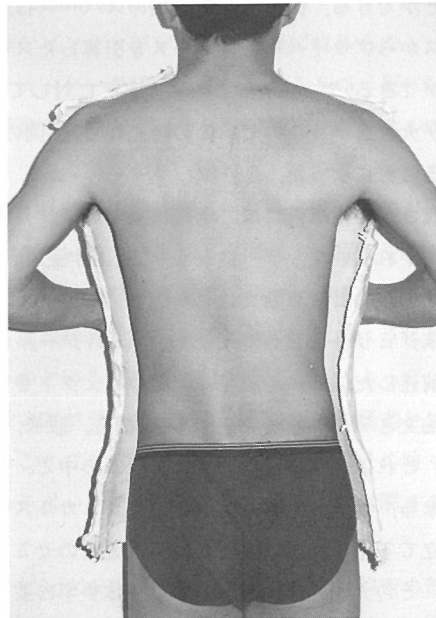


⑬ ファッション学校の中での追跡対象者の行動と空間との関係

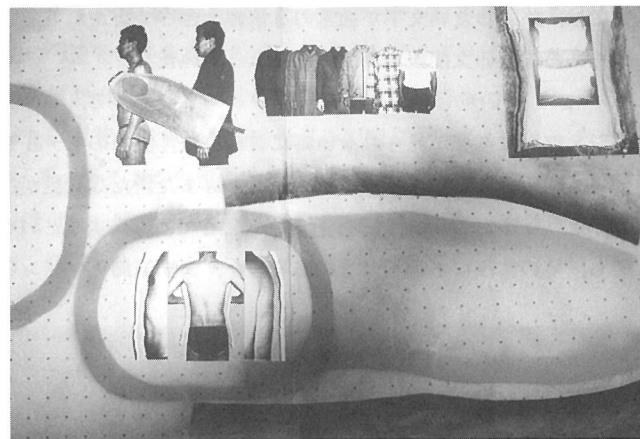


⑭ 興味を持ったファッションデザイン用のダミーモデル

校に聞いてみた。大変高いものらしい。そこで中古を捜すことにした。カムデンのよろず市のガラクタ屋で店を紹介してもらい、ようやく購入することができた。男性用のダミーモデルを買った。と言うのは、男である筆者自身の体と男性用ダミーモデルを使って、その間のスペースをスタディーしようと考えたからである。もちろん、追跡した女子学生と女性用ダミーモデル



⑬ダミーモデルのキャストと筆者自身の体との比較



⑭ダミーモデルと筆者の体との間のスペースを表現した図面



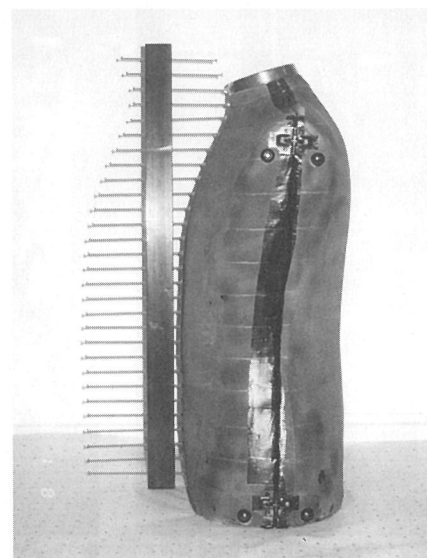
⑰ダミーモデルを半分に切りスーツケースを制作した

ルの方が適切であろうが、彼女の体を使うわけにはいかない。

このダミーモデルを使って、まず行ったことは、その表面を比較したことである。それから、プラスターをつかって筆者自身の体とダミーモデルのキャストを造り(写真⑮)、立体による重ね合わせをした。この作業は大変であった。妻に手伝ってもらいながら、バンテージプラスターという包帯にプラスターがついたものを使い、水をつけながら体に巻くのである。それから、乾き固まった後、両側を切り前後に取りはずすのである。ハサミでは堅くて無理なのでカッターナイフを使う。体を傷つけないよう注意しながら力を入れて切る。大変な作業であった。それらのスタディーを表現したドローイングが写真⑯である。その後、表面のスタディーから発展し、ベニヤ板のテンプレート造った。これを型紙として用いれば、様々な材料のボディができてあがる。プラスターのキャストに蠟を流し込み、筆者自身の体と同じものを造った。そして、それとキャストと重ね合わせることで、実際にダミーモデルと筆者の体の間のスペースを造りだした。これらの作業の中で、ダミーモデルを実際に購入したことは実に良かったと感じていた。ダミーモデルを横に置くと、何かやってみたい事が思い浮かび、また、その作業の中で次の新しい発想が生まれてきた。実際の体験が筆者の創造性を刺激したのかもしれない。この後、筆者はダミーモデルをのこぎりで真っ二つに切り、スーツケースを制作した(写真⑰)。スーツケースという入れ物を造ることにより、人間の体の中のスペースをダイレクトに表現することができると考えたからである。併せて、立体から断面図をおこすための道具も制作した(写真⑱)。

e. 学期末ジュリー

いよいよ学期末のジュリーが来た。それまでの成果を発表し批評される場である。他のユニットからチューター2人と外部か



⑱立体を計測し断面図をおこすためのメジャー

ら工業デザイナー1人が招待されて行われた。今までのピンナップジュリーとは異なり、かなり突っ込んだ質疑が行われる。発表者はできるだけ要領良く説明し、質問に適切に答えるという事に全力をかける。あいまいな説明をして後でつじつまが合わなくなり、追及に防御できず四苦八苦している学生も何人かいた。

このジュリーで、圧巻だったのは壁一面(3.5×10m位はある)を使って縮尺2分の1のロンドン2階建バスの断面図を書いてきた学生の作品である。この学生は、赤ん坊を抱いた母親を追跡し、バスの中での急ブレーキによって生じた反動を扱っていた。その体と手と哺乳瓶の動きが図面に詳細に表現されていた。彼は、この急ブレーキの動きをスタディーするために、バスの運転手に依頼し実際に急ブレーキをかけてもらい、タイヤの下に敷いておいた紙に残ったタイヤ跡、そしてビデオ撮影により、この反動を記録し考察していた。哺乳瓶を購入し、手の動きを自らスタディーしていた。そのスタディーから哺乳瓶と手の動きを表現したオブジェを制作していた。ある学生は、追跡した人が靴屋に入り靴を買ったので、靴の試しばきがテーマになっており、靴屋の展示スペースと客、店員の関係を扱っていた。靴屋のモデルを制作してその動きをスタディーし、また自分の足を石膏で造り、実際にはいている靴と比較していた。

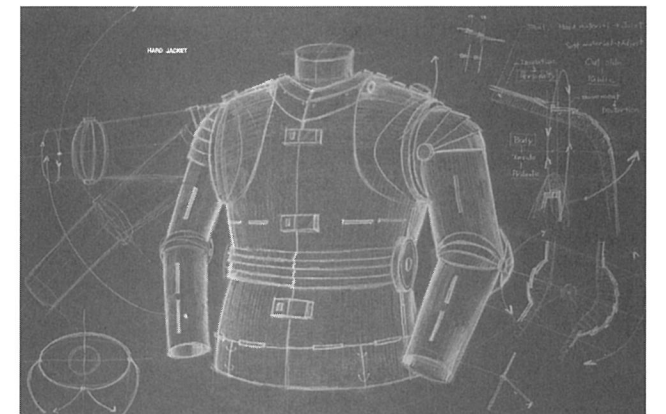
このように各学生の探求しているテーマは、同じユニットのプログラムの中でも様々であり、その表現方法もコラージュや原寸の図面、モデルやビデオで撮影したもの等、多彩である。評価の高い作品で共通していることは、一見あたりまえのことでありながら、疑問を持つことにより興味を広げ、そこにテーマを設定している点、そしてその探求の中である特定の規準を設定できる判断能力を身に付け作品にしている点、体験を伴う実験を繰り返し行いながらアイデアを検証し独自の発見をしている点である。

筆者のプレゼンテーションでは、これまでの作品に加え、包装用ビニールを使ってソフトジャケットを造り、体の動きに従ってどのようにそれが変化するかを表現した図面と、金属の様なハードなものでジャケットを造ったらどうなるかを表現した図面を出した(写真⑲)。壁一面に図面を貼りモデルを前に並べ、順にこれらを説明する形で行った(写真⑳)。自分の体を使っての考察、パブリックスペースとプライベートスペースの間の空間という考え方、スーツケースを造って体の内側の空間を表現した事などが評価された。反面これからの展開に対し、十分な考察ができていない点について、質問と要望があった。つまりこの探求から最終的にどのような所に行き着くのかという点である。もちろん、これまでの間に筆者自身多くの疑問が生じていた。ここで行われていることは、いったい実際の建築とどう関係するのだろうか、日本の大学や設計の実務で学んだ事とはまったく違う次元のことをやっているのではないだろうか、

また実際の建物の設計に役に立つものは得られるのであろうか、等々の疑問である。しかし2学期、3学期と進むにつれ、これら疑問は次第に消えていった。すなわち、ここで行われていることは一見建築とは異なる事をやっているようではあるが、人体の動作寸法、活動と空間の関係、現状の正確な把握、その学習の中から発展して提案に至るというプロセスは、まさに通常の建築計画で行われていることそのものである。ここで扱われている範囲が大変幅広く、同時に特定のテーマをできるだけ本質的に探求している点、その中で学生の独創性が十分に開発されている点に重きを置いている点、一般の建築学校と異なる点であろう。この考え方に立つと、今まで経験していた建築がある一定の狭い領域のものであるように思えてきたのである。

f. ユニットトリップ

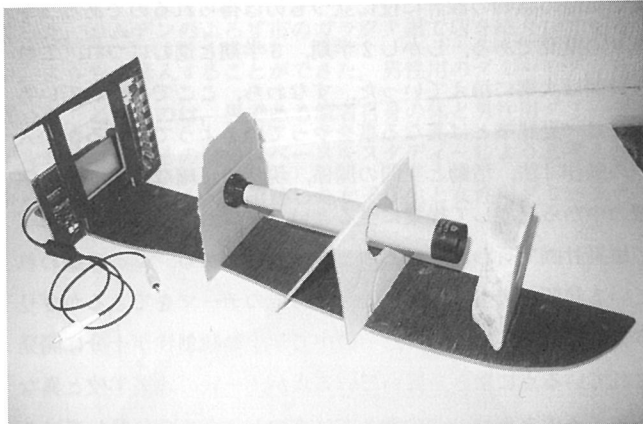
各ユニットでは、1年に1、2度ユニットトリップと称し海外または国内で1～2週間程度の研修旅行を行っている。費用は各自が負担するため、できるだけ安くなるよう企画される。ユースホステルや大学の宿泊施設、時にはチューターの知人の家に居候をしたりする。内容は各ユニットで異なりプログラムに強く関連しているものや、現地で短期課題を行うもの、現地の建築学校との合同プログラムや発表会を持つもの、観光的色彩



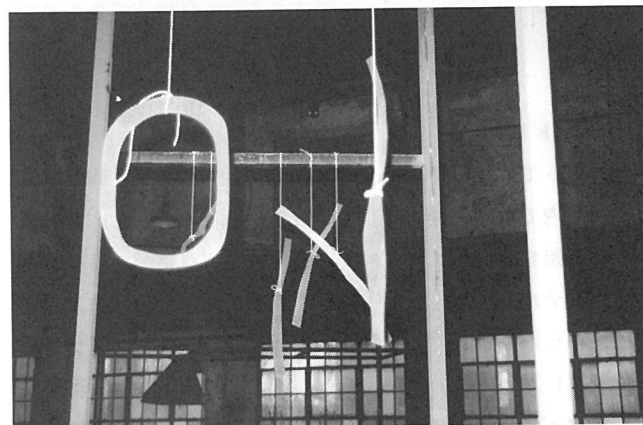
⑲金属等ハードな材料を用いたジャケット制作の為に図面



⑳学期末ジュリーの様子。外部からもチューターを呼ぶ



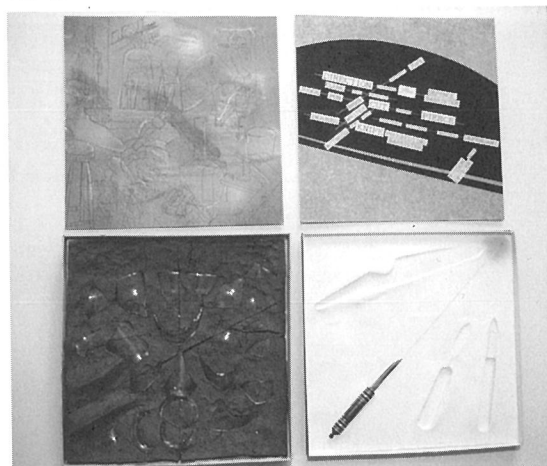
①ユニットトリップの後に提出したコンセプトモデル



②倉庫の中で行ったインスタレーション



③倉庫の前に置いたダミーモデルのスーツケース



④裁判所の傍聴事例の調査から制作したモデル

が強く異文化を経験させるといふもの等様々である。学生によっては、ユニットトリップの行先はユニットを選ぶ時の重要な要素であり、各ユニットでは毎年工夫した企画がなされている。筆者自身、このユニットでベルリンとプラハを訪れることができ、大学院のユニットトリップでは、1年目にギリシャ、2年目にニューヨークに行き、それぞれ忘れがたく実のある経験を持つことができた。

このユニットのスタディートリップは2学期に入ってから冬に行われた。ベルリンでは短期課題が与えられた。旧東ベルリンのある2つの場所を使ってショートプロジェクトを行うのである。各学生にはどちらかの場所が割り当てられ、リサーチを行い提案をするのである。敷地は、その1km四方の大きな地域から、各自興味を持った所を設定する。筆者は、旧東ベルリンと旧西ベルリンを繋ぐFriedrichという道路沿いの地域に興味を持った。このユニットのメインテーマが「監視」であり、東と西と分断していた時に東側から西側がどのように見えていたかという事と、その分離帯に興味を持っていた。と言うのは、分離帯は何十mという幅で誰も入ることができないスペースを持っており、それが筆者の扱っている〈間のスペース〉に関連するような気がしたからである。筆者は、まず旧東側のいくつかの建物の中から西側が見渡せるような場所を搜した。そしてそこからの写真を撮影し、その場所のスケッチをした。各自、宿泊先に戻ってから、調査をまとめるドローイングを行う。皆それぞれ用紙、パステル、水彩絵具等を持参し部屋でワークを行う。食事の後にピンナップジュリーが行われた。順にプレゼンテーションを行う。学生によっては、どこかではがしたポスターに現地で拾ってきた布やプラスチックの瓶のかけら、新聞等を貼ってコラージュを造っている者もいる。調査には、距離や面積、位置関係といった物理的な調査や現地の人にインタビュー等を行う社会的な調査以外に、こういった現場に落ちている物、使われている材料等を手掛かりに敷地の特質を考察するといった方法もあるのである。一見ゴミ集めといった様相を持っており興味深いやり方である。筆者は、A1程度の大きさの紙に調査した場所を表現したコラージュを造った。批評は、「調査する前から観点がはっきりしていてもおもしろくない、この事が調査の内容を貧弱にしている」であった。次の日もう1度新たな姿勢で敷地に向かった。

プラハに移り各自に指示書が配られた。そこには美術館やギャラリーのリストと展示内容が紹介され、各自見て回るよう指示されていた。その他、現地の大学教授を交えての食事会があり、東ヨーロッパの状況やチェコとスロバキアの関係等の生の情報を得ることができた。プラハで2泊した後、ふたたびベルリンにもどりジュリーを行う。各学生はベルリンに向かう電車の中でワークを行った。ロンドンにもどって最初の週にユニットトリップのしめくくりのジュリーが行われた。写真④は、

その時に出したモデルである。望遠鏡を逆から見ることににより、見かけの距離と実際の距離との違いを、東側と西側の現在の状況に重ね合わせるというアイデアである。

g. インスタレーション

次に与えられた指示書の中で我々がやることは、Shepherd's Bushという所にある今はもう使用していない倉庫で、インスタレーションを行うことであった。インスタレーションとは日本語訳では「装置」であり、体験を伴うオブジェで芸術表現の1つである。多くは空間を扱っているため建築と繋がりが強い。この課題は、今までに得られた知見を発展させインスタレーションを行うことにある。これを通じて抽象的概念について考える。ここでは異なるイメージをいくつか重ね合わせ、新たな発想を得るといった方法が試みられる。指示書には、「今までに進めてきたプロジェクトの中で得たことを基にし、この敷地の特性を読み取り最も適した場所でインスタレーションを行いなさい」とある。しかしなかなかピンとこない。新たに与えられた敷地と今まで進めて来たプロジェクトとどのような関係があるのだろうか。これに対しチューターからは、「敷地を見回って感じるところがなければ、特にやる必要は無い、しかし何か興味深い物が発見できれば、今までやってきたことと自然に繋がったイメージを得ることができる。そこからの発想でインスタレーションをきなさい」とのアドバイスである。まだ、はっきりと分からない。まずは、敷地に行ってみようということで次の日の朝早く向かった。

敷地は、廃車置場の奥にあり、錆びた鉄骨が見える巨大な倉庫とガラスが割れた廃校校舎があった。筆者は倉庫に興味を持った。倉庫の中には昔事務所であったと思われる場所があった。これが筆者には倉庫のスペースが外部と事務所スペースの〈間の空間〉と感じられ、筆者のプロジェクトと関連しているように思えたからである。筆者はそのイメージを表現するために、鉄骨に筆者の体とダミーモデルとの〈間の空間〉を型取った板をつり下げた(写真②)。また、ダミーモデルのスーツケースを持ってきて倉庫の横に並べるというインスタレーションを行った(写真③)。バスの急ブレーキを扱っていた学生は、倉庫に置いてあった鉄の骨組みを天井から吊るし、骨組みにスライドプロジェクターと鳩の餌を乗せた。そして実際に鳩を放し、鳩が餌を食べることによって骨組み全体が揺れ、プロジェクターが写し出す夕焼けの風景がそれに応じて揺れ動く、というインスタレーションを行った。揺れるというアイデアは、バスの急ブレーキの話を知っていたので何となく理解できたが、鳩やサンシャインの風景とは何を意味するのか、その時はよく分からなかった。後で聞いてみると、このユニットトリップでの経験をインスタレーションに取り入れてこのようになったらしい。何がプロジェクトを発展させるかは人それぞれである。

人の活動に関わる建築は理解しやすいが、インスタレーションは抽象的芸術表現の1つであるがゆえに、理解しづらいところがある。しかしながら、プロジェクトの中でこれを扱う意味は、インスタレーションに取り組むことにより、建築と芸術の関係を考えてみる訓練、そして、実際に芸術に取り組むという訓練を行うことにある。

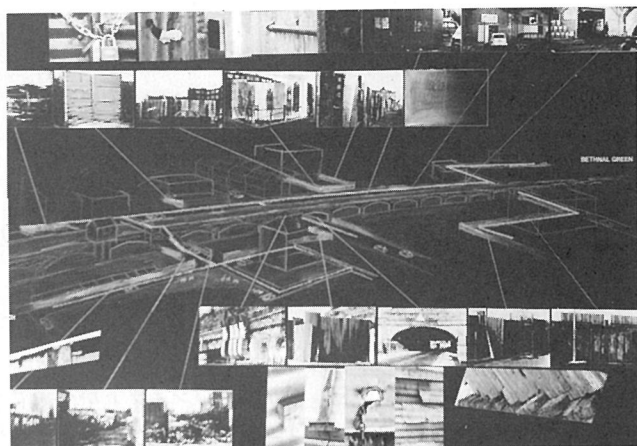
h. 第2、第3の課題

追跡という第1の課題の次に、第2の課題が与えられた。これは、2つの意味がある。1つは、最初のプロジェクトが不調で何の発展も見られない学生が、第2、第3の課題で復帰をすることができるということである。もう1つの意味は、第1の課題で見つけたテーマをそのまま続けて1年間通すより、別な課題を扱うことにより、新たに得られたアイデアが最初のプロジェクトを深めていくという効果や、逆に第2の課題でのテーマを第1で得られた経験により発展させるという効果が期待できるという点である。筆者の場合は後者であった。

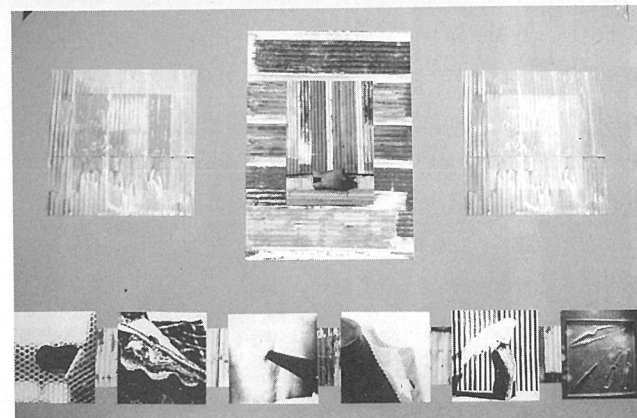
第2の課題は、裁判所の傍聴である。「最高裁判所または刑事裁判所に行き、いくつかの裁判を実際に傍聴し、あるできごとが法廷でどの様に再現されているのかをリサーチきなさい、そしてスペースとイベントの関係を考えてみなさい」という課題内容である。筆者が傍聴した事例は、バブで常連の客がウェイトレスにナイフで刺されて重傷を負うというものであった。筆者には法廷の中での裁判官と被告、陪審員と目撃者、そして検事と弁護士の位置関係に興味深かった。そこで、筆者が造った物は、事件を表現するオブジェと法廷の各人の位置とその方向性を表現する図面である(写真④)。この課題の興味深い所は、過去に起こった出来事が法廷という異なる場所で同じように再現されるという点に注目し、出来事と場所の関係を過去と現在という時間軸で学生に考えさせる点である。また同時に、出来事を図面やオブジェに表現するという練習にもなっている。

第3の課題は、具体的に敷地が与えられ、そこで、課題1と2で得られた知見から何かを設計するという内容である。ようやく建築らしき課題が与えられたと感じた。しかし敷地と言っても地下鉄の2つの駅の間の地域というだけで特定の区域を指しているわけではない。また、特に何を設計きなさいというわけではなく、何でも良いというのである。とっかかりが無いので、そのことをチューターに相談した。「敷地にまず行ったりサーチをきなさい。そこで興味を引くものが見つかればそれを探求きなさい。そして何かを設計きなさい。その敷地が気に入らなければ、他に敷地を捜しても良い。設計とは言っても建物だけを指すのではない。オブジェでもよいし、インスタレーション、パフォーマンスでも良い」という事である。

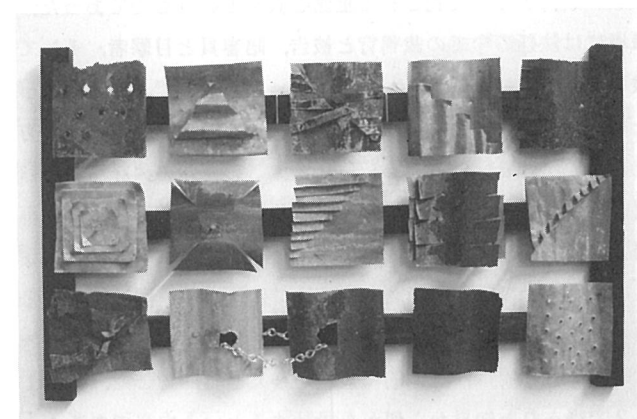
AAスクールの設計課題において、建物の種類があらかじめ設定されていることは少ない。課題はできるだけ間口を広げ



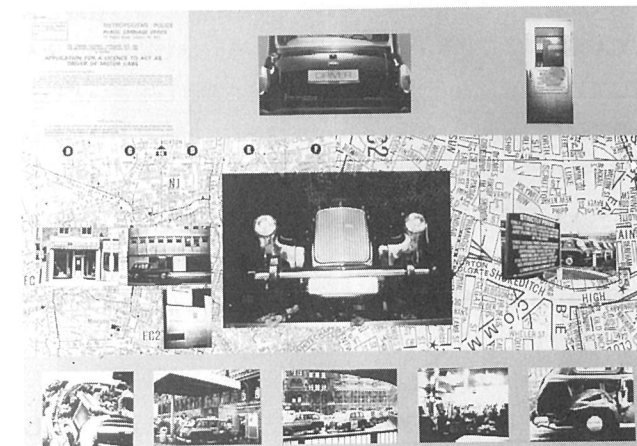
⑯敷地の状況と筆者自身が抱いた興味を表現したコラージュ



⑰トタン板の色、テクスチャー等を盛り込んだコラージュ



⑱トタン板を用いて制作したオブジェ



⑳ロンドンタクシーの調査結果を表現したコラージュ

ておき、多くは学生の興味から入り、それを深めて知見を得、それらから何かをデザインするというスタイルをとる。その興味とは、自然現象や社会現象、人と人との関係や人と場の関係、集団と都市の関係等、あらゆることがテーマになりうる。従って、設計するスペースの種類や内容があらかじめ設定されているということは、興味を持つことができる範囲をあらかじめ限定する事となり、自由な発想を制限することになる。これは何より本質的な所をじっくり考える機会を逃しているとも考えられる。これを評価の軸で捉えれば、あらかじめ定められた課題のゴールに向かい、いかに巧みに条件を満足し、問題を改善できる建物設計できるかというスタイルではなく、ゴールは定めておらず、いかに自分の興味を見つけ出し、それをどのように深めていくか、そして独創性のある魅力的なゴールを創りだすかということが評価軸になるスタイルと言える。

筆者がこの敷地で興味を持ったのは次の2点であった。1つはトタン板である。この辺りには多くの空地がありそれらの多くはトタン板で囲まれていた。その取付方や色、形等が大変興味深かったのである。2つ目はブラックタクシーである。この辺りには多くのタクシー専門の修理工場、部品店等が集まっていた。ブラックタクシーは戦前からのスタイルを全く変えておらず、そのトラディショナルなボディーは皆に親しまれ、赤い2階建バスと共にロンドンの名物となっている。これらの興味を含めたコラージュを制作した(写真⑯)。アドバイスは、「敷地にある実際のトタン板をどうにか手に入れなさい。それが次へのヒントになる」であった。さっそく敷地にもどりトタン板を捜し回った。ようやくゴミ捨て場のようなところにトタン板の切れ端が見つかり、それを持って帰った。色、錆び具合、取り付け方等を考慮しながらトタン板のオブジェとコラージュを造った(写真⑰⑱)。その次のアドバイスは、「今度はタクシーの方に注目しリサーチをしなさい」ということだった。その免許制度、歴史、タクシードライバーの1日の生活等をインタビューしたり免許管理事務所等を訪れてスタディーを行った。それらをまとめたコラージュが写真⑳である。チューターは、「タクシーの方がおもしろくなりそうだ、これを探求した方がよい。次のステップとして、タクシー自体を手に入れなさい。ボディー全体が一番良いのだが大きすぎるので、ドアでも構わない」であった。ちゅうちょしている私に、「買うのに高ければ、ユニットバジットから援助してあげる」と強く勧めるのであった。ユニットバジットとは各ユニットにその所属する学生の数に合わせたあらかじめ与えられている予算である(1人100ポンド程度)。これは、ユニットが外部からの講師を呼ぶことに使ったり、ユニットトリップの費用の一部、学生の作品の援助等、ユニットマスターの判断で自由に使用できる予算であり、ユニット独自の活動を支える重要な財源となっている。

ここまで言われれば買うしかない。次の日に敷地の修理工

場から中古の後部席のドアを購入した。さて買ったはいいがどのように扱ってよいか分からない。トタン板を切ってオブジェを造った経験があるので切ってみようという衝動があったが、チューターはまずドアを良く観察する意味で、水彩絵具を使ってドアの表面を正確に描写すること、そしてドアの断面図を書くことを勧めた(写真㉑)。これらの作業をする中で、私はタクシーのドアの内側のスペースと外側のスペースを1学期に扱った〈間の空間〉と重ね合わせて考えていた。

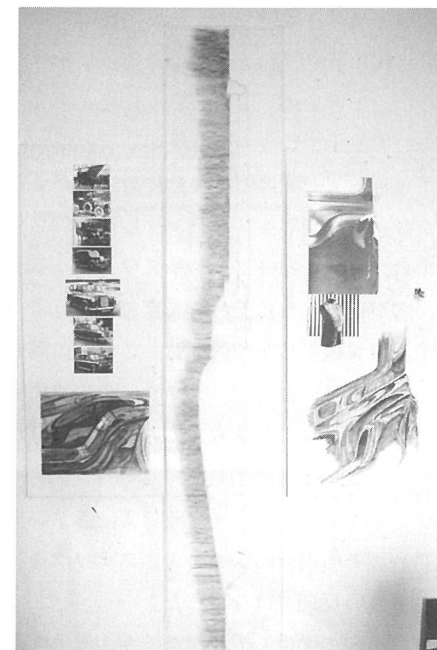
AAスクールの建築教育の特徴として体験的な実験を重んじることがあげられるが、ダミーモデルを手に入れてプロジェクトを進めるとか、タクシーのドアを実際に購入してスタディーをするといったやり方は、本や資料から得られた知識ではなく実際の体験を伴うスタディーから得られた知見である。実際の作業つまり自分の体を使った実体験から独創的な発想が生まれる事を期待しているのである。

i. 苦闘

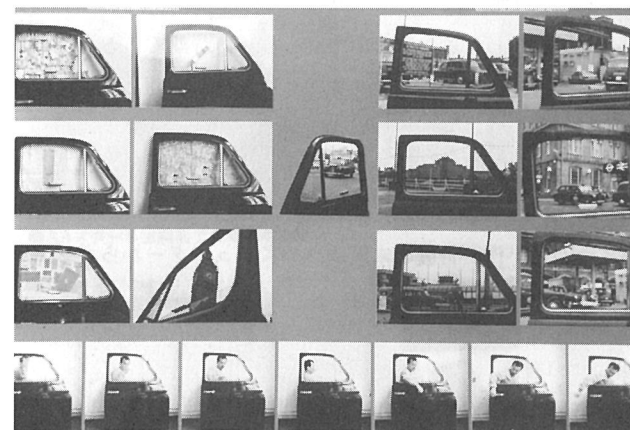
タクシーのリサーチの一環として、タクシーに強く関わる施設、すなわちホテルと空港へ行きタクシーの役割や動線等を観察した。そして、外と内の〈間の空間〉ということとそれらの施設で考えてみた。ピンナップジュリーでこの考え方に対し指摘された事は、「リサーチはもう十分である、次はデザインすることを考えなさい」であった。

この3学期の始めの時期は、今までのワークをまとめて成果を産み出す大事な時期で、RIBA試験のための準備、学年末のレビュー(進級のインタビュー試験)の前に提出する論文や必修科目のレポートや制作の締切等、多くのプレッシャーが学生に加わる。ユニットでのプロジェクトも各自リサーチの時期からジャンプしデザインしていく時期にあたる。これまでにユニットのベースについていけなくて、途中で他のユニットに移った学生は2人、学校をやめた学生が1人いた。少しでも沈滞していると、プログラムの流れは早いので、どんどんと取り残されていく。これを避けるためには、プロジェクトで迷ったらすぐチュートリアルを受けアドバイスを受けることであろう。ある学生は、1,2学期は調子良かったが、この時期に入り明解なコンセプトがつかめずデザインすることに苦闘していた。チューターの要求と批評が強かったのか、泣きながらチュートリアルを受けている時もあった。この時期をしっかりと乗り越えると学生は何か重要なものを獲得するのであるが、それには苦闘に耐えるタフな精神が要求される。筆者も例にもれず苦闘した。

最初にデザインしたのはホテルである。これは、タクシーでホテルの建物に直接アプローチし、リフトを使って上階の部屋までタクシーごと移動しその部屋の横に接続することにより、部屋とタクシー内の両方のスペースを使うことができるというアイデアであった。しかし「タクシーが建築の中に溶け込むとい



㉑タクシーのドアの表面と断面のドローイング



㉒タクシーのドアに関わるスタディー



㉓タクシーのボディーを用いたアコモデーション

うコンセプトは面白いが十分な魅力はない。別な事を考えなさい」というチューターのアドバイスであった。

次に、シフトワーク(1日を時間で区切り何人かの交代で行う仕事)に注目し、タクシードライバーやウェイター、ミルク配達人等のための施設をホテルの前に設計した。これもアイデアがやや平凡であるというネガティブな反応が返ってきた。この

ままの状況でデザインを続けていても発展性は少ないと感じ、もう1度ドアに関わるリサーチをすることにし今度は前部席のドアを購入した。ドアを通じて行われる行為、すなわち客とドライバーの先行の指示や代金の支払等のやりとりのスタディー、ドライバーが後部ドアを開ける時の動作のスタディー、ロンドン観光のタクシーの役割等をスタディーした。ロンドン観光のスタディーでは、ドアをビッグベンやタワーブリッジ等の観光名所に運び、客がどのようにそれらを窓越しに見るのかといったアングルで写真を撮影した(写真③⑩)。これらの調査の後、タクシーの中のスペースに注目し、タクシーの中で住宅の様に寝泊まり生活できるようなことを考えてみた(写真③⑪)が、これも不評であった。チューターのアドバイスからタクシードライバー専用のスナックも調査してみた。そして、タクシーの最小回転半径に注目し、その内側のスペースにスナックをデザインした。が、それも良い反応ではなかった。

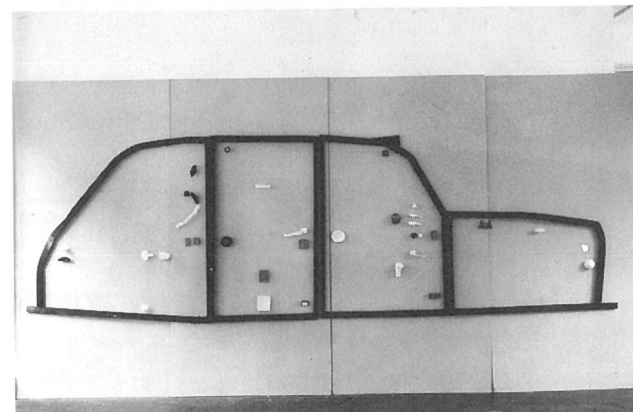
この時期は、他の学生も同様であるが、今まで調べた事、学んだ事を基に、消化してデザインするという過程にあり、学生の力量が問われる1年の中で最も苦しい時期である。またこれは同時に、創造する能力を獲得する大事な時期とも言えるのである。

j. パフォーマンス

いくつかの不作と苦闘の末、ようやくチューターからポジティ



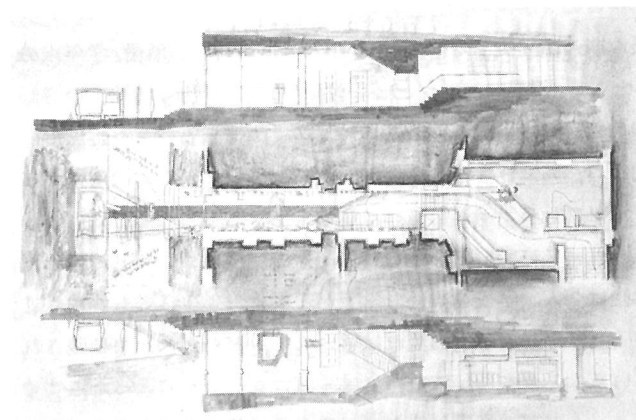
③ AAスクールの玄関前に置いたタクシードアのスケッチ



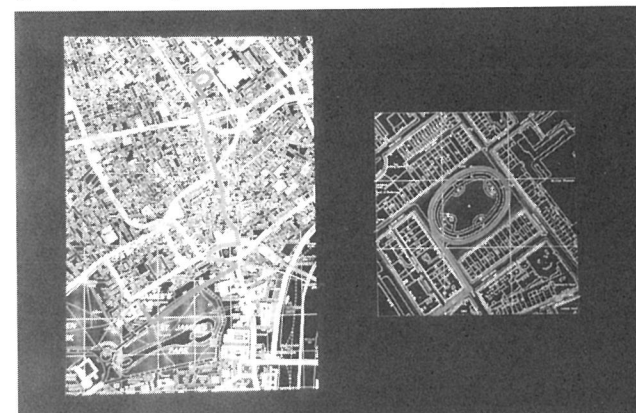
⑩ タクシーの断面フレームにタクシーの部品を吊り下げる

ブな反応が得られたのは、タクシーのドアをAAスクールの前に置いたスケッチとドアの内側パネルのキャストを見せた時であった(写真③⑫)。このアイデアはドアやハンドルといったタクシーの部分(部品)をAAスクールの玄関に並べ、訪れる人にタクシーのスペースを経験させるというものであった。「これは、空間、イベント、ディテール等、様々な意味で発展性がある。この方向で進めなさい。まず、できるだけ多くのタクシーの部分の型取ったキャストを造りなさい。そして訪れる人とは誰なのかを考えなさい」とのアドバイスが得られた。やっと先が見えてきた。さっそく、ワークにかかった。タクシーのライト、ギアレバー、窓ガラスのハンドル、等のキャストを造った。その多くは近所に住んでいるタクシードライバーに頼み、彼のタクシーで型をとらせてもらった。単にキャストをとるだけではおもしろくない。どう表現するかである。筆者は、タクシーの原寸大断面を正確に型取ったフレームを造り、ハンドル、レバーやライト等のキャストをそのフレームからそれらの位置すべき所に正確に吊り下げた(写真③⑬)。

訪れる人が誰なのかのイメージについては、モデルを造る作業中に徐々に浮かんできた。ロンドンタクシーはそれ自体イギリスのシンボルであり、歴史的、伝統的イメージを持っている。従って、訪れる人についてもその様な人がふさわしいのではないか、例えば王室の人である。その中でもチャールズ皇太子は伝統主義者で、建築についての発言も多くビッタリではな



⑭ パフォーマンスの各セッティングの平面図と立面図



⑮ チャールズ皇太子を乗せたタクシーのAAスクールまでのルート

いか。しかし実際に来てもらう事は不可能だ。では、その代わりにそっくりさんを使おう、これは偽物であるから、本物のタクシーと偽物のタクシーモデルの対比と絡ませることができる。さっそくこのアイデアをチューターに相談した。「これは面白い、独自性があり、ハプニングが期待でき興味深い、この方向でいきなさい。どのようにモデルを配置するか、どのように偽物のチャールズ皇太子が現われるかといったシナリオを考えなさい」というアドバイスであった。

考えた配置(写真③⑭)は、AAスクールの玄関前に原寸大のタクシーのモデルを設置、これは、フレームから吊り下げられた多くのタクシーの部分のキャストでできている。その両側に前ドアと後ドアを並べる。これにより2次元のモデルが空間を持つ3次元のモデルとなる。ドアには取っ手とノッカーを逆につける。これは前衛的なAAスクールと逆の立場にいる伝統主義者チャールズ皇太子を想起させる。玄関のステップにはビデオカメラを固定で設置する。監視カメラの様にパフォーマンスを録画する。玄関に入った所にタクシーのドアを型取ったプラスターのキャストを設置する。その窓部分にスライドプロジェクターでタクシーのルームランプ、ドアノブ、レバーや床といったインテリアを写し出す。つまり、それを見てタクシーの内部空間を疑似観光ドライブするという設定である。床には赤い絨毯を敷く。チャールズ皇太子の現われ方としては、ケンジントンパレスから本物のタクシーでやってくるという設定(写真③⑮)、AAスクールの正面で停車する。停車する位置にはテープでタクシーのプランを描いておく(写真③⑯)というアイデアである。この考えに、チューター全員OKである。

すぐに制作に取りかかった。ワークショップでドアを立てるスタンドとモデルを立てるスタンドを鉄骨を溶接して作った。プラスター製のドアのキャスト作りは大変であった。薄く作ると弱くてもたない、厚過ぎるとドアから取り外せない。結果、薄く作りドアから取り外した後、プラスターで補強するという方法で制作した。後は小物である。カーベットは赤い裏生地で代用、カーベットの押棒は角鋼を切って金色に塗装、停車位置の目印は工事用のポールを手に入れ金色に塗装した。チャールズ皇太子のそっくりさんは、芸能エージェンシーを通じて探すことができた。コストは1時間200ポンドである。高いので半分はユニットバジットから出してもらうことにした。パフォーマンスの日時が決まり、イベントリスト(1週間の予定と記事を載せた学校新聞)に、【ロンドンタクシープロジェクト、6月25日2時に建築のハプニングが学校前で起きる、詳細は1時間前にお知らせします】と掲載した。ポスターを作り人が集まりそうな所に貼った。これで準備はすべて整った。

このパフォーマンスの為にモデル、キャスト、スタンド等様々な物を作った。これらは、図面を一旦書いて作成したわけであるが、図面といっても詳細に設計したわけではない。ある



⑯ 道路に描いたタクシーの平面図とモデル



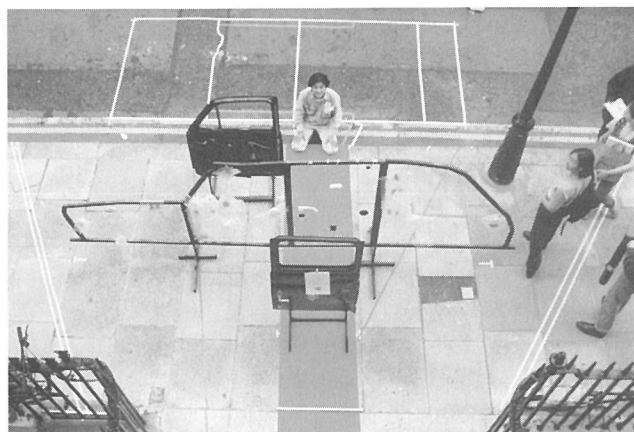
⑰ AAスクール玄関前でモデルの組立

程度の基本寸法、材料、組立方法を示したものであり、必要な情報が揃った後、すぐにワークにとりかかる。ワークの中で図面作成段階では予想しなかった事に対しては、調整しつつ制作を行う。また、ワークの中で新しいアイデアが閃いたら変更し、それらをどんどん入れ込んでいく。よくチューターは「図面通りに作成するのであれば、わざわざモデルを作る必要は無い。作る過程で新しい発想を基に変更していくことにモデル作成の意味がある」と言う。つまり、これはモデル作りを単にアイデアの表現物を制作するという目的だけではなく、創造の過程として捉えているのである。

いよいよ当日である。午前中から作業に入った。道路にテープを貼り、モデルを組み立てる(写真③⑰)。組立と準備は、このパフォーマンスの一環である。組み立てている状況を見ると、その人の中にこの後何が起こるのかといった期待が生じる。この期待は2時からのパフォーマンスのハプニングを助長するのである。モデルは、3つのダンボールにあらかじめ分けて包んでいたものを、ふたたび解く(写真③⑱)。各オブジェ(プラスターや粘土でできたキャストでタクシーのレバーやライトといった部分を型取った物)もあらかじめビニールで包んであり、それも解いていく。そしてモデルを組み立て、カーベットを敷き(写真③⑲)、ドアから取ったキャストのスクリーンを設置していく。そして1時間前になり「王室の人がタクシーでAAスクールを訪



⑧梱包されたモデル。組立と準備もパフォーマンスの一部



⑨前と後部ドアを設置し、タクシーのモデルができあがる



⑩偽のチャールズ皇太子が到着し、チューターに挨拶



⑪偽のチャールズ皇太子はいかに本物の様に演技する

れる、玄関に集まってください」と放送された。筆者は、近くのホテルで偽物のチャールズ皇太子とパフォーマンスの打ち合わせを行い、タクシーと一緒に乗りAAスクールの前に現われた(写真⑩)。30人以上の人が集まっている。2階の窓から見る人も多い、十分である。所定の位置にタクシーを止め、降りる。驚きと苦笑の声が聞こえる。そしてチューターが挨拶をする。筆者はチャールズ皇太子の同行者であり紹介をする役目である。モデルを説明し皇太子の質問に答える(写真⑪)。皇太子はモデルを見て触る。打ち合わせ通りである。これは、皇太子がタクシーに乗って現われ、モデルのタクシーを見て触る、つまり偽物(皇太子)が本物(タクシー)を経験した後に偽物(モデル)を経験するという設定なのである。偽物の皇太子は、さも本物の様に観ている人に握手をし話しかける。話しかけられた人は、さも本物の皇太子に答える様に答える。これは自発的な演技と言える。チューターがAAスクールの校長アランバルフォアを紹介する(写真⑫)。校長も良きAAスクールの校長として演技(偽物)をすることとなる。つまり、このプロジェクトにおいて、本物と偽物がパフォーマンスを通じて交互に重なり合うのである。皇太子は玄関に入り、タクシーのドアを型取ったスクリーンに移しだされるタクシーのインテリア部分を観る。つまりタクシーのインテリアを皇太子に観光的に疑似体験させるというアイデアである。そして、次は皇太子を連れてAAスクールを案内する。バー、ワークショップ、チュートリアル最中のユニットスペース、ジュリーを行っている教室、様々な場所を訪れる(写真⑬)。そこにいる人達は偽物にせよチャールズ皇太子が現われるとはもちろん思っていない。ある人は驚くし、ある人は、何かのパフォーマンスと感じつつ演技の中に入ってくる。AAスクールという前衛的なカラーを持つ学校に伝統論者の皇太子がいるというシチュエーションが対比的で、これが建築的ハブニングを強調している。そして、玄関に戻り待っていたタクシーに乗って去って行き、パフォーマンスは終了する。

このパフォーマンスには、いくつかの対比的なコンセプトがあり、それらがパフォーマンスの中で見え隠れする所に特徴がある。すなわち、本物と偽物、準備と本番、ネガティブとポジティブ、白と黒、部分と全体、2次元と3次元、伝統と前衛、外と中、参加と傍観等々である。

k. ファイナルジュリー、レビューと年度末展示会

年度末には、ファイナルジュリー(年度末講評会)とレビュー(進級審査)が行われる。ファイナルジュリーは、通常、学外と他のユニットから講評者を招いて行われる。各学生の1年間の成果がここで問われることになる為、要領良く説明し、質問に対して的確に返答することが要求される。曖昧な説明や返答には容赦なく問題点が追及、攻撃される。ユニットのチューターにとっては、自分の指導したプロジェクトが他のチューターの目に

触れ講評されるわけであるから、自らのポジションの確認と研鑽の場にもなっている。ユニットのチューターの指導に沿って順調に進んでいるプロジェクトでも、講評者によってはまったく正反対の批評が飛び出すことも少なくない。こういった場合は、講評者と指導チューターとの間で学生そっちのけで論戦が行われ、見学者にとっては実に楽しく勉強できる場であり、人気講評者が招かれたジュリーには多くの見学者が集まる事になる。

我々のファイナルジュリーは、パフォーマンスを行った次の週であった。それは、朝から始まり夜10時位まで行われた。筆者は、この1年間で制作した図面とモデルから必要なものをセレクトしたものと、パフォーマンスを撮影したビデオを使って説明した。講評者の反応は全体的に肯定的であったが、筆者が十分に考察せずやや急ぎ足で進めていた部分、全体の一貫性にとらわれ過ぎている点について、追及を受けた様に思う。講評では学生の考えていた以上に読み取り、期待以上の反応をする講評者もいる。こういった時には各自の考察の甘さを自覚すると同時に講評者から多くの事を学ぶことになる。1学期で「臭い」を扱った中国人の学生は、その後発展し、「音声」と「視覚」も取り扱い、それらのアイデアを盛り込んだ大きなモデルを制作し、ジュリーにのぞんでいた。また、鳩とサンシャインを扱っていた学生は、その後一貫して「ゴールド」を扱い、最終的にサンシャインの光が差し込むことを考えた結婚式のスペースを設計した。モデルを用い、実際にどのようにゴールドの光を造り出し、どのように効果的にそのスペースに差し込ませるかという事を実証し、大変良い講評を受けていた。

学年の最後にはレビューが行われる(写真⑭)。進級審査であり5年生の場合は卒業の審査会となる。進級審査において、学生は順にポートフォリオの説明を審査員である4人のチューターに行い、質疑を受ける。結果はその時点で決定される。毎年概ね3分の1程度の学生がこの時点でパスし、落ちた学生は、夏の間に各自プロジェクトを進展させ再度9月に行われるレビューに挑戦することができる。そこでもパスする学生は更に3分の1程度であるから厳しい審査基準と言えよう。卒業審査はチューターと校長とで構成されるディプロマコミティーという評議会で行われる(写真⑮)。これは年1回年度末に行われる。この場では学生の作品を担当したチューターが他のチューターに説明する形で行われる。この場で各学生の可否が決定されると同時に各ユニットにおけるプログラムと指導方法の質が学生の作品を通じて間接的に評価されることとなる。この場に出てくる作品はすでにプレビューという前審査を通過したもので、5年生全体の3分の1にあたり、ここで、4分の1程度が落ちるため、全体としては毎年20%程度の学生にしかディプロマが授与されないということになる。落ちた学生は、年に1度しかディプロマコミティーが開かれなため来年まで待つことと



⑫校長もパフォーマンスに参加し、握手を交わす



⑬偽のチャールズ皇太子をAAスクールの様々な所に案内する



⑭年度末のレビュー(進級審査)の様子



⑮ディプロマコミティー(卒業審査)の様子

なる。

このように、学生は、入学試験での面接、ユニット選びの面接、そして、何度もあるジュリー、進級審査、卒業審査という関門を経て晴れて卒業となるわけで、精神的プレッシャーの中で自分の作品を自分で説明し質問に答えるという訓練が行われ、その中で自分を表現し、売り込むという能力も自然と身に備わるのである。この経験は就職する時の面接や実社会に出るからの仕事にも当然役に立つ。日本人にこういった能力を持つ人が少なく感じるのは、このような経験や訓練をする機会が、学校教育において少なかったからではないかと思う。

進級・卒業審査が終わると年度末展示会が開かれる。バーや食堂等のスペースも含め校舎のあらゆる所が展示スペースとして使われる。各ユニットに展示スペースが割り当てられ、思い思いの展示が行われる。学生の作品を中心に展示を行うもの、ユニットのプログラムをテーマに展示を行うもの、この展示会のために特別にテーマを設定してグループの作品を制作展示するものなどのユニットによって内容は様々である。我々のユニットでは蒸気とゴールドをテーマとして取り上げ、それらを表現するオブジェとモデルを配し、その周りに各学生の作品を展示した。展示会は通常7月末まで一般公開されている。翌年度の入学予定者にとって展示会はユニット選びの良い参考になる。この時期他の学校も展示会の時期なので見比べると各学校のカラーが感じられて興味深い。ロンドン大学バートレット校の展示会におけるディプロマのユニットの展示の場合、多くがアブストラクトな展示表現となっており、最近の傾向として興味深い。

展示会の初日のオープニングパーティーには学生のみならず多くの会員が集まるため歩くのに困難なくらい盛況となる(写真⑩)。バンドが入るなど、一種の学園祭的雰囲気である。この日は、進級した者、落ちた者、晴れてDiplomaが取れた者、そしてチューター、皆が一緒になり1年の苦労を互いにねぎらい、楽しく時を過ごすという年度の最後を飾る華やかな日となる。



⑩多くのAAメンバーがオープニングパーティーに集まる

3. まとめ

AAスクールの教育は、前述したように多くのユニットが存在し、各ユニットで工夫された様々なプログラムで建築教育が行われている点に大きな特徴がある。従って、ここまで説明したプロジェクトの流れや内容から、AAスクールの建築教育全体を説明することはもちろんできない。しかしながら、1つのプロジェクトの流れと内容を詳細に読み取ることにより、AAスクールの教育の根底に流れている各ユニットに共通するチューターの姿勢と建築教育の特徴を捉えることができる。それらを以下に整理してみる。

- ①単に建築の知識を学ぶ場ではなく、各学生の個性を伸ばし、同時に建築家としての態度を身に付ける場として捉えている。いくつかの建築科目の授業から建築知識と設計プロセスを教わり、それに沿って設計するというスタイルではなく、自分の興味、命題を発見し、狭い範囲でも可能な限りそのことを掘り下げていくことにより、建築に対する各自のアプローチの方法を開拓し、独自の設計プロセスと建築に対する考え方を獲得するというスタイルをとる。
- ②作品の評価は、いかに深く各自の興味、命題を探究したか、デザインした作品がいかに力強く魅力的であるかという点が問われる。これは、いかに巧みに様々な条件を解決し設計をしたかという設計技術の習得具合の評価軸とは根本的に異なり、各学生の独自性と創造性の開拓の程度に焦点を当てた評価軸と言える。
- ③設計課題の最終ゴールはあらかじめ決められているのではなく、学生の興味と発展性において決められる。その多くが住宅、美術館、事務所、学校というような建物種別の設計課題ではなく、大まかな、範囲、枠、きっかけといったものが与えられており、その中で学生の視点から興味、命題を喚起させ、それを発展させていくという過程を取る。従って、最終ゴールはあらかじめ決められておらず、フレキシブルなものである。
- ④成果物は設計した完成結果のみならず、そのプロセスを重視する。学生が与えられた課題に対し、どのように、それを読み取りアプローチしたか、そして何を考え何を得たか、どのように発展しデザインをしたのか、という方法を問う。従って、学生の作品集は結果までに至る道程を表現した図面やモデルが中心となる。
- ⑤実体験を重視する。資料のみにたよる設計は、どうしてもその掘り下げが甘くなりがちで、個性が感じられない作品となりがちである。学生独自の方法で課題にアプローチし、実際の体験を通じてスタディーすることにより、独自の視点で独創的なアイデアを獲得し、そこからデザインされた作品は、個性豊かであつ説得力のある作品になる、という考え方である。

る。

- ⑥模型はデザインした結果を表現するのみならず、創造性を喚起させるための道具であり設計プロセスの一部である。すなわち、モデルを造る作業を通じて、予想しなかった問題を見出し、それを解決するため考え調整する。そして、新たなアイデアを作業の中で発見し付加していくという創造性の一プロセスとして捉えている。
- ⑦作品は建築物のみではない、また表現は図面だけではない。建築の捉え方が、単に建物を設計するという事ではなく、世の中に存在する物と現象、すなわち、原子、宇宙、生物、哲学、心理、社会、政治、文化、芸術等様々なカテゴリーを建築は扱うものであるという、かなり範囲の広い捉え方をしている。従って、その作品は、建築物、芸術物のみならず、社会システム、政策、組織、理論の提案やコンセプトの提案等も含まれる。表現方法も図面やモデルのみならずビデオ、パフォーマンスやインスタレーション等も含まれ、コンセプチュアルアートといった現代美術的な様相も持っている。

これらの考え方を一言で言うと、AAスクールの建築教育は、建築の技術者を育てる教育ではなく、広義の建築家を育てる教育である。各学生の建築における個性を限りなく開拓する教育の場の意味、そして建築を広い観点から捉えている姿勢は、効率的かつ機能的な近代的建築の価値感が基本的、一般的となっている現在において重い。もちろんこれにはどのような人材に育てるべきかという議論がある。すなわち建築家のみを育てたとしてもすぐれた建物ができる環境が揃うというわけではなく、様々な分野の建築技術者の研鑽と協力があってこそであるという議論である。この観点に立てばAAスクールで行われている建築教育が十分なものであり建築教育の模範であるとは言いきれない。しかしながら、設立されて以来、依然として話題性があり高い国際的評判を持ち続けており、そのユニークな建築教育の場を求めて世界中から多くの学生が集まってくるという事実は見逃すことはできない。建築の価値観の多様化、学生気質の多様化の中、各建築学校の独自性と個性化が求められている現在において、そして更にはこれからの建築教育は何なのかを考える上において、AAスクールの創造性を育てることを基盤とする建築教育は欠くことのできない重要な存在と言える。また、それをバックアップしているイギリス建築界とイギリスの文教政策の多様性と柔軟性は無視出来ない。

おわりに

ここでは、学部のプログラムを中心に述べてきたが、大学院においても同様、別な意味においてユニークな教育が行われている。このことは、紹介されている資料が少ない為、一般に良く知られていないが、想像していた以上にフレキシブルなプログ

ラムで個人の観点を大事にした教育が行われていることが、大学院の「都市と住宅」の研究室に籍をおいて理解できた。この内容の説明と教育方法の分析については、また別な機会に譲りたいと思う。筆者は本学を卒業し東京都立大学大学院修士課程を終えて日本の会社で9年間設計実務を行った後、思うところがあり退社して、AAスクールに入った。従って、慣用的な設計にどっぷりつかった後にこのような経験をしたわけである。始まったばかりの時は、正直、言葉の問題に加えてユニークな教育には悩まされ、胃を痛くして病院にも行った事がある。それほど強い刺激だったわけであるが、胃の痛みはなくなったものの今でも程度の差こそあれ、刺激的な経験は続いている。なかなか不可解な学校であることは事実であるが、同時にとても魅力的な学校であると思っている。

参考資料

- ・STRATEGIC STUDY OF PROFESSION, RIBA Publishing, 1992
- ・SCHOOL OF ARCHITECTURE, RIBA Publishing, 1992/1993
- ・PROSPECTUS 91-92, Architectural Association School, 1991
- ・PROSPECTUS 92-93, Architectural Association School, 1992
- ・PROSPECTUS 93-94, Architectural Association School, 1993
- ・PROJECT REVIEW 91-92, Architectural Association School, 1991
- ・PROJECT REVIEW 92-93, Architectural Association School, 1992
- ・PROJECT REVIEW 93-94, Architectural Association School, 1993
- ・PROSPECTUS 93-94, University College London Bartlett School 1993
- ・瀬口哲夫「英国建築事情」『建築ジャーナル』, 1991年
- ・『建築文化』Vol. 45, APR. 1990, 彰国社, 1990年
- ・『日経アーキテクチャー』9-30 1991, 日経BP社, 1991年
- ・『スペースデザイン』329号, 鹿島出版会, 1992年
- ・『建築雑誌』7月号, Vol.108, 日本建築学会, 1993年

(1995年6月29日受理)